石井十次顕彰会だより

vol.25

公益財団法人　石井十次顕彰会

公益財団法人　石井十次顕彰会

第25回石井十次賞贈呈式を昨年4月に開催

大分県初、「別府光の園」が受賞

公益財団法人・石井十次顕彰会は第25回「石井十次賞」の受賞者を大分県別府市の社会福祉法人「別府光の園」（濱田多衛子理事長）に決定し、昨年4月、高鍋町中央公民ホールで贈呈式をおこないました（**写真中央は賞を受け取る統括施設長の松永忠さん**）。**大分県の施設がこの賞を受賞するのは今回が初めてとなります。**

別府光の園は1936年に開設された結核療養所「光の園病院」が前身。敗戦の翌年に食べ物を求めて集まってきた戦災孤児を創立者・長田シゲさんが迎え入れ、児童養護施設として活動を始めました。

現在は児童養護施設のほか、障害のある卒園者のためのグループホームや保育所、児童館、地域の子育て世帯などが情報交換できる児童家庭支援センターなどを運営。児童養護施設では46人の子どもたちがスタッフとともに寝食をともにしています。

施設内には広場やベンチなどが設けられ、地域の子どもやその保護者も気軽に出入りできる開放的な雰囲気。当顕彰会ではスタッフと子どもたちが家族のように暮らしている点や地域に開かれた姿が児童福祉の理想型であると評価し贈呈を決定しました。

当日は河野俊嗣・宮崎県知事（出席は代理）や近隣自治体などから、多数の来賓が出席。松永統括施設長が謝辞を述べると、会場からは盛んに拍手が送られていました。

審査経過を報告する福島一雄選考委員長

「偉大な賞をいただき、スタッフも喜んでいます」と松永統括施設長は謝辞。右奥は濱田理事長

ホームページができました

石井十次顕彰会のホームページができました。十次の精神と功績を日本はもとより世界に広く発信していきます。ぜひご覧ください。

公益財団法人石井十次顕彰会　で検索

ご報告

このたび、みなさま方より多額のご寄付をいただきました。
ここに厚く御礼申し上げますとともに、謹んでご芳名を記させていただきます。
（平成28年1月1日～平成28年12月31日）

篤志寄付

高鍋町　原　重喜様
東京都　三谷加代様
高鍋町　有限会社　事務機のフクモト様
高鍋町　井上博功様
高鍋町　立正佼成会　高鍋教会様
高鍋町　高鍋ロータリークラブ様
高鍋町　株式会社高鍋衛生公社様
宮崎市　印刷センター　クロダ様
高鍋町　高鍋町振興協議会様
高鍋町　株式会社　増田工務店様
木城町　株式会社　尾鈴山蒸留所様

編集後記

「石井十次顕彰会だより」第25号をお届けいたします。

今冬は寒暖の差がある日が続いておりますが、お変わりなくお過ごしでしょうか。

今回、石井十次賞を受賞された「別府光の園」さまを、当顕彰会では昨年の早春にお訪ねし、取材させていただきました。驚いたのは南欧風のおしゃれなデザインの施設建物群。それらが広場を中心に配されており、とても明るい雰囲気に包まれていました。また、敷地内には教会があり、そこに地域の子どもたちが放課後に立ち寄り、施設の子どもたちといっしょにスタッフから勉強を教わったり、遊んだりしていました。その地域に開かれた姿に感動した次第です。

さて、当顕彰会の理事長が2016年11月より萱島稔に替わりましたので、ご報告させていただきます。

春の足音も聞こえ始めました。最後になりましたがみなさま方のますますのご健勝とご多幸をお祈り申し上げております。

発行日　2017年2月1日
発行元　公益財団法人　石井十次顕彰会
〒884-0006
児湯郡高鍋町大字上江8113番地
☎0983-23-4312

ニュース

「為せよ、屈するなかれ」のことば 書に仕立て町内小中高に贈呈

石井十次顕彰会は、安倍晋三内閣総理大臣が 2016 年 1 月 22 日、第 190 回国会の施政方針演説で引用した石井十次のことば「為せよ、屈するなかれ。時重なればその事必ず成らん」の書を町内 6 つの小中高校に贈ることを決定。その贈呈式を 2016 年 10 月 31 日、各小中高校の校長、教頭先生参列のもと、高鍋町教育委員会でおこないました。

2016 年 1 月 22 日、第 190 回国会の施政方針演説での石井十次引用部分

日本で初めての孤児院を設立した石井十次は、児童福祉への「挑戦」に、その一身を捧げました。たくさんの子どもたちを、立派に育て上げ、社会へと送り出しました。

孤児がいれば救済する。天災の度に子どもの数は増えていきました。食べ物が底を尽き、何度も困窮しました。コレラが流行し、自らも生死の境を彷徨いました。

しかし、いかなる困難に直面しても、決して諦めなかった。強い信念で、児童福祉への「挑戦」を続けました。

「為せよ、屈するなかれ。時重なればその事必らず成らん」

濱田多衛子理事長と子どもたち。写真下は子どもたちと食卓を囲むスタッフ。光の園では普通の家庭と変わらぬ光景があちこちに広がる

写真上は光の園の施設。南欧風のデザインが陽光に映える。写真右は地域の保護者たちとの子育て勉強会

社会福祉法人 別府光の園
大分県別府市荘園8組
☎0977-23-2506

施設の子どもだけでなく 地域で育てる文化めざす

別府湾を望む市街地に児童養護施設「別府光の園」はあります。ここで１９４６年、長田シゲシスターは、食べ物をを求めて別府に集まってきた戦災孤児に「私がお母さんになりましょう」と声をかけ、寝食をともにする「光の園白菊寮」を設立。施設の歴史が始まります。

６０年には米陸軍のアーン少佐が、駐屯地の神奈川県・座間から光の園まで２週間以内で歩く「賭け」をおこなって仲間などから寄付を募り、話題を呼びました。そのエピソードをもとに石原裕次郎主演で「ある兵士の掛け」という映画も制作されています。

６８年に保育所「光の園子どもの広場」を開所。これを皮切りに、児童家庭支援センター「光の園子ども家庭支援センター」、児童クラブ「光の園子どもクラブ」、児童館「光の園親子の広場」などを開き、施設は充実。２０１５年には障害のある卒園生のために就労しながら生活するグループホームも誕生しています。

この６施設を融合させ、施設に暮らす子どもたちだけでなく地域の子どもたちとその家族を見守る役割を担わせていると松永統括施設長。勉強会やサークル活動、「音楽と子ども」をテーマにしたコンサートなどさまざまな取り組みもおこなっており、地域や学校、保護者からあつい信頼が寄せられています。

濱田多衛子理事長は「長田シゲの理念を守り子育て支援と社会的養護を一体化させ、地域で子どもを育む文化を創出したい」と意欲的。今後の同園の動きが注目されます。

▶表彰状全文

石井十次賞

社会福祉法人　別府光の園　殿

貴　別府光の園は　昭和十一年の創立以来　創立者　長田シゲの掲げたDeo　Gratias「神に感謝」「敬天・如己・慈愛」の精神を理念とし多くの子供たちを育て　社会へ送り出してこられました

現在では　真心に満ちた児童養護活動と共に　地域の子供たちとその家族をも見守る　地域に開かれ　地域に愛される　児童福祉の理想的な施設として全国に知られるまでになられました

さらに　地域の中で子供たちを育む　新たな児童福祉文化の理想を追い求め　常に未来に向かって挑戦し続けておられます

このことは　多くの困難を乗り越え　孤児救済に生涯を捧げた　児童福祉事業の先駆者　石井十次先生の理念に沿った偉業であり　心から敬意を表し　第二十五回石井十次賞を贈り　その功績をたたえます

平成二十八年四月八日

公益財団法人　石井十次顕彰会

理事長　黒木　敏之

第1回「なわのおび賞」を贈呈

第34回を迎えた石井十次生誕記念式典

「石井十次賞」贈呈式に続き、「石井十次生誕記念式典」を高鍋町中央公民館ホールで開催しました。34 回目を迎えた式典では町内の小中高校生３人が、石井十次への思いなどを作文にまとめて発表。また、石井十次顕彰会が十次の精神や生き方を高鍋町の子どもたちに継承してもらおうと新たに設けた「石井十次なわのおび賞」の第１回贈呈もおこないました。

高鍋西小学校５年の岩田奈々さんは、十次のことを学ぶなかで、思いやりの心と人のために何かすることの大切さを知り、世界に十次のような人物がいることを伝えたいと発表。高鍋東中学２年の永友策大さんは、十次は自分の歩むべき道をしっかり決め、目標を達成する強い意志を持っていたとした上で、大人になったら人のため、自分のために頑張れる人になりたいと決意を述べました。

意見発表の最後に登壇した高鍋農業高校３年の河野龍摩さんは、現実と向き合い、強い意志を持って自分にできることに踏み出す一方、いつでも「人の役に立ちたい」という気持ちを持ち、困っている人に手を差し出す明るく穏やかな自分でいたいと締めくくりました。

「石井十次なわのおび賞」は善行やスポーツ、芸術分野で感動的な活動、業績を残した小中学生が対象。
今回は5人が受賞

「石井十次小伝」「英訳石井十次物語」を贈呈

意見発表

「孤児の父」を学んで

高鍋西小学校　5年　岩田　奈々

私は、今まで、孤児の父である石井十次先生の、人を思いやる優しい気持ちについてたくさん学んできました。最初は、石井十次先生は、三千人の孤児を救ったすごい人というイメージがありました。でも、十次先生の学習をするにつれて、最初は友だちへの優しい心から始まったことが分かりました。

私が、学習した中で、心に残ったことが二点あります。一点目は、十次先生の思いやりです。自分が大切にしていたものを、こまっている友だちにわたすまでの思いやりの心を持っている十次先生をそんけいします。二点目は、人のために何かをするということです。十次先生は、医者の夢をやめ、医学書を焼いてまで、孤児を救うと決め、一人の孤児から三千人までにおよぶ孤児を救って育てました。人のためにつくすという十次先生の心は、すごいものです。私も、ごみ拾いなどの小さなことから始めて、人のために何かをできるようにしたいです。

高鍋西小では、毎年、石井十次先生をしのぶ会が行われています。その会では、自分たちが学んだことを活かし、各学年が発表をします。そして、地いきの人たちに十次先生のすばらしさを知ってもらいます。

他にも、教室には明りん堂の教えもあります。そこに書かれている教えには、今の社会で大切な礼ぎの正しさや、人との関わりなどがあります。

このように、私は、十次先生から思いやりの心と、人のために何かをするという大切さを学びました。これからも、石井十次先生をしのぶ会で、地いきの人たちに十次先生の思いやりなどを知ってもらい、世界にまでこんなにすばらしい人がいるということを伝えたいです。そして、私たちは、明りん堂の教えを忘れず、集団生活をおくり、高鍋西小の校訓である、「信、愛、和」を大切にしていきたいです。みなさんも高鍋町と高鍋町のい人石井十次のことを、これからも大切にして、少しでも多く「石井十次の輪」を広めていきましょう。

石井十次先生から学んだ僕の決意

高鍋東中学校　２年　永友　策大

僕が石井十次先生を知ったのは小学生の頃でした。その時は「縄の帯の話」や「児童福祉の父」と呼ばれていたことなどから、心優しき、すばらしい人というイメージしかありませんでした。しかし、中学生になった今、「猪突猛進」とも言われた意志の強さこそ、十次先生の生き方を支えていたのだと考えます。急激に日本社会が近代化する中、どんな時にも信念を曲げず、自分を信じる道を突き進むのは、誰もが出来ることではないでしょう。僕も集団の中にいると、周囲の人と意見が違ったときに、自分の思いをしっかりと伝えることが出来ないことがあります。十次先生が、厳しい環境にありながら、多くの孤児のために全身全霊をそそぎ、孤児救済に生涯を捧げた意志の強さが大人になろうとする僕に強い

（前ページより続く）

印象を与えます。

さまざまな苦労を積み重ねながらも、その意志の強さが限りない優しさにつながったのは、両親の深い愛に包まれ、成長したからだと思います。しつけに厳しく、教育熱心な父、物心両面で手助けする優しい母、そんな両親の背中が十次先生の他を思う人格形成につながったはずです。

人は誰かに愛され、必要とされれば心豊かに成長するのではないでしょうか。今の世の中は贅沢な時代と言われ、いろんなものが満ち溢れていますが、心が貧しいせいか悲しいニュースが数多く報道されています。「自分さえよければ、他人が傷ついても関係ない」誰もが根本では、そんな考え方を持っているかもしれません。しかし、人を犠牲にしたらそれが巡り巡って、自分に返ってきます。幸せになりたかったら、周りの喜びを自分の喜びとし、幸せの種をたくさんまいて、幸福の花を咲かせたいものです。

三千人以上もの孤児を育ててきた十次先生は偉大であり、僕にはとても真似できそうにありませんが、その精神はしっかりと胸に刻まれています。

僕の夢は外国と日本との架け橋となるような仕事に就くことです。しかし、今の僕では、達成できるような夢ではありません。なぜなら、努力が足りないからです。十次先生は医師を目指し、猛勉強したり、子どもたちのために一生懸命、お金を集めたりしました。それができたのは、自分の歩むべき道をしっかり決め、目標を達成しようとする強い意志を持っていたからだと思います。これからを生きる僕たちには、たくさんの可能性があります。大人になった時に後悔しないよう、しっかり考え、人の為、自分の為に精一杯頑張れる人になりたいです。まずは、悩んでいる友達はいないか、困っている人はいないかと、身近な所から目を配り、みんなが笑っていられるよう、努めていく決意です。

僕の尊敬する石井十次先生のように…。

石井十次先生から学んだこと

高鍋農業高校　３年　河野　龍摩

私は唐瀬原中学校の出身です。児湯郡に住んでいれば、石井十次先生の事は、何かと耳にします。学校でも地域でも、すごい事をした人だと教えてくれます。でも私は、実はどんな事をした人かよく分かっていませんでした。今回、記念式典があると知り、図書室で本を読んだり、インターネットで調べてみたりしました。そして、今私がなんとかしたいと思っている事を解決する力をもらいました。

私は今、生徒会役員として学校行事の企画運営に携わっています。

これまでにも私は「人のために何か役に立つ事がしたい」と思っていました。しかし、行動しようと思っても、なかなか実行できず、いつか機会があればと思っていました。そんなある日、私は電車で出かけていました。１人のおじいさんが乗車してきました。その日は休日だったこともあり、席はほとんど空いていませんでした。私は乗車ドアから離れたところに座っていたこともあり、心の中で「あのおじいさんに誰か席を譲ってあげないかな」と他人事のように思っていました。結局、おじいさんは座る事なく電車を降りて行きました。

この「他人事」のように考えてしまうのが、いつも私を後悔させます。やる気はあります。人の役に立ちたいと思っています。学校では進んで仕事も引き受けます。でも、知らない人と関わるとき、ふっと自分の中に閉じこもって一歩が踏み出せないでいるのです。席に座れず、ただ立っているしかなかったおじいさんを他人事として捉えてしまった自分を恥ずかしく思います。「あのとき、自分から立ち上がり、あのおじいさんに席を譲るほどの勇気があったら…」と思い返しましたが、過ぎてしまった事をやり直す事は出来ません。しかし、石井十次先生の行いからすれば、ぼんやりとした私の「いつか誰かのために」という想いなど、ただのいい人ごっこにすぎません。私はそれに気づきました。これからは、どんな場所にいても困っている人の気持ちになり、積極的に声をかけられる様になりたいと思います。

石井十次先生は将来を約束された医学の道を捨て、誰も試みなかった孤児院の創設に全てをかけ、社会福祉という言葉すらなかった時代に３０００人もの子ども達を育て上げ、社会に送り出しました。強い意志があったからこそ、彼はそのような偉業を成し遂げる事が出来たのだと思います。

現代の日本では、児童虐待やいじめなど、子どもを取り巻く様々な社会問題が数多く発生しています。時代とともに、その内容は変わりますが、子ども達の苦しみや悲しみは変わりません。石井十次先生は、「密室教室」をはじめ、真剣に子ども達と向き合う努力を続けました。私もまず理想ではなく現実と向き合い、強い意志を持って自分に出来ることへと踏み出したいと思います。高校生活もあと１年です。生徒会役員として、みんなが楽しく充実した高校生活を送れるよう、一歩踏み込んだ悔いのいない活動をしていきます。そして、いつでも「人の役に立ちたい」という気持ちを持ち、困っている人に手を差し出し、助けを起こせるよう強く明るく穏やかな自分でいたいと思います。

第1回石井十次なわのおび賞
受賞者紹介

※受賞者の学校名・学年は受賞時のものです。

高鍋東中学校　3年　香川尚輝さん

〈受賞理由〉
高鍋東中学校の生徒会長を務め、リーダーとして活躍した。ボランティア活動に率先して取り組み、ペットボトルキャップの回収運動、書き損じはがきの回収、募金活動などを生徒会活動に取り入れ、高鍋東中学校の生徒が福祉への意識を高めることに力を注いだ。

高鍋西中学校　3年　森田萌水さん

〈受賞理由〉
文武両道に励み、英語検定や漢字検定、数学検定などあらゆる検定に挑戦し、いずれも素晴らしい結果を収めた。陸上部でも活躍し、昨年は西都児湯地区中学校総合体育大会、県大会で上位に入賞する活躍をした。学級委員長や生徒会役員を務め、人望が厚い。

高鍋東小学校　6年　西吉栞汰さん

〈受賞理由〉
小学1年生からスポーツ少年団・高鍋陸上に入団し、熱心に練習に取り組んでいる。県内の数々の大会では上位入賞を果たし、昨年は全国小学生陸上競技交流大会に出場。自己ベストタイムを出して見事3位に輝いた。礼儀正しく思いやりがあり、朝の清掃など、ボランティア活動にも積極的に参加し、同級生や後輩からも慕われている。

高鍋東小学校　6年　仲本　愛さん

〈受賞理由〉
好奇心旺盛で豊かな表現力を持ち、県の人権に関する作品、読書感想文コンクール、サイエンスコンクールで優秀賞、最優秀賞を受賞し素晴らしい成績を収めた。平成26年には第60回青少年読書感想文全国コンクールで入賞し、日本代表として中国と韓国の子どもたちと交流し、考えや視野を広めることができた。

高鍋西小学校　6年　野中ほなみさん

〈受賞理由〉
高鍋ミニバスケットボールクラブに所属し主将として活躍した。校内持久走大会では1年から6年まで毎年1位を獲得した。誰とでも仲よくでき、学校ではクラスの意見をまとめたり、よりよい方法を判断して動くなど皆から信頼を持たれている。小学校でのあいさつ運動や校内清掃にも積極的に取り組み、ボランティア活動に励んできた。

レポート

第26回石井十次顕彰のつどい

児童が「最初の孤児」を熱演

第26回を迎えた「石井十次顕彰のつどい」を2016年11月6日、高鍋町中央公民館ホールでおこないました。

石井十次を歌う会による美しいコーラスで幕が上がると、高鍋西小学校児童が合唱や合奏を披露。クイズ形式で石井十次の功績も紹介しました。

毎年、演し物が替わる児童劇は、十次が孤児を預かって育てるきっかけとなったエピソードを舞台化した「最初の孤児」を上演。1時間近くにわたった児童たちの舞台に会場中から惜しみない拍手が送られていました。